

円山の街並みに今も生きる

上田万平

円山の村づくりを先頭に立って進め、弟の善七とともにその発展に力を尽くした、上田万平を紹介します。

上田万平は、天保十二年（一八四一年）に現在の岩手県盛岡市で生まれ、明治四年（一八七一年）四月、三一歳の時に弟の善七や家族とともに庚午三の村（同年五月に円山村に改称）に移り住みました。

庚午三の村は、札幌本府の設営にあたり、食糧を供給するための衛星村落として開かれた村です。二年（一八六九年）に開拓使が移民を募集。これに応じた東北地方の農民が翌年から入植し、家屋の提供や米などの支給を受けて未開地を開墾していきま

した。万平は、生来の働き者だったこともあり、熱心に農業に取り組みました。また、日用品や雑貨の店を開いたところ、大変繁盛し、万平のもとには多くの村人が訪れたそうです。この様子はやがて開拓使の



上田万平
（「円山百年史」より）

耳にも届き、万平は、移民の農業指導を任せられるなど、皆から信頼を置かれる存在となっていました。万平ら村人の努力で、円山産の野菜は評価を高めていきました。南一西一一付近は、村人と街から来る仲買人の取引場所となり、大変にぎわったそうです。この取引場所は市街地に広がるにつれて西へ移動し、後に円山朝市と呼ばれました。

現在、多くの市民に親しまれている円山登山道も、万平・善七兄弟が開いたものといわれています。この登山道は、明治の初期に山頂から石材を採掘するために設けられたものでした。大正三年（一九一四年）、兄弟はこの道を改めて登山道として開き、そのかたわらに観音像を安置したのです。村人にとって

円山は、札幌神社（現在の北海道神宮）のある神聖な場所でした。このため登山道も、風景を楽しむだけの場所ではなく、信仰の場として整えられたのでした。



円山八十八ヶ所

このほか、簡易教育所（現在の円山小学校）を開設したり、現在の裏参道に赤松を植栽したりと、万平は多方面に功績を残しました。また、生涯を通して多くの公職に就きました。この中には、万平を深く信頼する村人たちに担がれてなったものも多かったです。

村では、万平の功績をたたえて「上田一徳翁之碑」うえだいつとくおんのひを建立。現在、この碑は伏見稲荷神社の境内に移設されています。

六年、万平は七十七歳でその生涯を終えましたが、今でも万平の功績は、円山の街並みの中に息づいています。

（平成十二年四月号・第六十六回）



上田一徳翁之碑
（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）